平成 30 年 8 月 4 日

本郷町区制施行 71 周年、一般社団法人日滝史蹟保存会設立 70 周年記念講演会

「中 世 の 須 田 氏 と 本 郷」

講師　長野県立歴史館　村石正行先生

本郷町の皆さん、あるいは文化財保護に携わられている皆さん方、長い歴史の中で本日を迎えられたということで、おめでとうございます。 先程ご紹介いただいたとおり出身は八町です。

今日お話しするのは、須坂を代表する戦国武将、須田氏のお話しです。須田満親を皆さんご存知でしょうか。この満親については大河ドラマの主人公にしてもいいかなと思います。面白い人物です。秀吉、家康、上杉といった大名と渉り歩いてきた。そういう生き様というのは、資料もたくさんありますし大変面白い。

伊東潤さんの小説「吹けよ風呼べよ嵐」という本がある。須田満親が主人公になっている。資料も残っていますし、地域にある資料、全国に点在している須田さんの文書、須田さんの末裔の方も大阪堺にいらっしゃいますので、将来こちらにおいでいただいて皆様と交流を深めていただければと思います。

須田氏というのは一説によると、須坂の地名につながっているというゆかりのある家です。戦国時代になると、この須田氏は松代の海津城の城主になる。1 万2千石という石高を戦国時代の終わりにもらう。1万石が大名と言われている。お殿様の堀さんが 1 万53石でしたからそれより多くの石高を川中島に持っていたわけです。須田さんは結局は須坂に残らないで、慶長 3 年に秀吉の命令で東北に移住します。江戸時代には米沢に行き、米沢藩の家老になります。須田満親は大河ドラマになった直江兼続と遠戚関係になるんです。上杉景勝の腹心で非常に重要な役割を果たしてくる。これが本郷の出身であった。本郷が生んだ大きい戦国武将であった。

直江兼続はご存知でしょうか。上杉景勝の腹心で、もともとは樋口という姓でした。信州の出身です。800 年ほど前の木曽義仲の兄弟に樋口兼光というのがいます。それが先祖でその末裔が樋口予六兼続という人です。この人が直江家の跡を継いで上杉家の重臣に上り詰めていきます。先の小説では川中島の戦いが舞台の始まりになっていますが、須田満親も出ていますし、若い直江予六も出ている。

この直江兼続と信州の関係、満親の長男と直江兼続の妹（名は不明――説ではおきたさん―）が結婚している。すなわち直江兼続と本郷の須田さんとは遠戚関係だった。そもそも須田一族というのはいつごろから出てきたのか。大岩城が本郷須田氏の本拠地といわれている。麓にあるお寺蓮生寺が館であったとなっている。須田さんは系図でいくと、もともとは清和源氏のなかでも井上満実の9番目の子供に為実がいまして、これが須田氏の始まりだといわれている。ただ千年も前の話で、本当にあっているかどうかは難しい。もともといた地域の有力な武将がいまして、井上は清和源氏の直系でして、自分の一族がつながっているというようになる。直接的な血縁関係がないかもしれませんが、系図のうえでは井上の一族、須田氏ということになっている。

坂田にある天徳寺を開いたのは井上氏の一族で、満定の 9 男静実が開いたと伝えられている。。私は須田氏の関係者が開いたお寺だと思っています。須田氏の発祥の地というのは定説がない。平安時代の武士というのは、地名を名乗るんですが須坂に須田という地名はない。坂田には古い地名で砂田というのが残っている。これが須田の発祥ではないかという説がある。須坂は扇状地で砂っぽいのでリンゴやブドウの栽培が今盛んになっているが、砂田とか須田というのは、扇状地にはよくある地名です。ですから坂田から本郷につながっているわけです。今は小さいお寺ですが、天徳寺があります。天徳寺から望みますと、坂田の浄水場、臥竜山、井上が見渡せる。

去年の 3 月に大阪にいらっしゃる須田さん―正に直系の末裔―のお宅へ行きまして系図を見させていただきました。須坂市誌の中にも写真で掲載しております。

須田さんはどこに所領があったのか。ここの本郷もそうなんですが、基本的には百々川から南が井上で、北が須田、西が高梨というのが鎌倉時代のようです。だんだんと須田さんの所領が広がっていって小布施の方まで広がっていった。井上さんはだんだん落ちていくんですが、須田と高梨とは勢力争いでかなり大きくなっていく。南北朝時代には米子で大きな戦いがあったりしていますが、須田さんの所領は須田郷―これは臥竜山の周辺、大岩郷―これは本郷周辺、そして高井野郷―高山村の高井の郷ということで、このあたりが須田氏の所領。さらに南北朝時代になると、米子、米持、中島、福島とだんだん勢力を拡大していくわけです。小布施にも行く。

鎌倉時代の記録で、六条八幡宮の造営注文があり、その中に所領の大きさを示す記述があり、高梨さんが五貫文、井上さんが三貫文、須田さんが三貫文―貫というのは銅銭で、一貫は1000文―で3000文になる。銭１文は換算すると100 円ぐらい。大きいか小さいかというと、.信濃の国は所領規模が小さい武士が結構いる。一番大きい武士は7貫です。これは仁科さんと和田さん―長野の西和田、東和田―。もともと井上氏の分家だったと言われていた須田さんは井上とほぼ同じ、高梨はその上を行っている。

先程の所領の中で、本郷―昔は大岩郷といわれていた、大岩というのはもともとは関東の地名で、関東からこっちに人が移り住んできた。須坂に普願寺があります。須坂は浄土真宗の大きな町として発展していますが、蓮如上人が信州へやってきて須坂のあたりを註釈されたという伝説もいろんなところに残っている。普願寺はもともとは本郷にあった。あれは関東の大岩にあった。普願寺が一時須田の本郷に来ていたのが記録に残っている。

さて、満親さんは大岩須田氏の出身です。もう一つの臥竜山の方の須田氏とは違う。どちらが本家、分家なのかはむずかしかった。須坂市誌を書く時も、本郷という名前から須田氏の本家が本郷ではないか、という考え方もできますが、所領規模では臥竜山の方が大きい。この点は留保します。

系図によると満泰がお父さんなんですが、満龍寺さんにある供養塔は満国さんです。満国さんの養子に入ります。本郷の大岩の満親さんは、武田信玄が信州にやってきます。川中島の合戦です。第3次川中島の合戦がこのあたりが大きな戦いになります。高山村駒場で戦いがあったり、須坂の福島で戦いがあったりしました。このころ、当時の大岩城主だった満泰と満親が上杉家―長尾景虎を頼ってむこうに行ってしまった。それ以降はこちらは武田の支配下になった。

須田満親は須田姓を名乗っていますが、越中―今の富山県に移った時に、舟見家の養子になります。まだお父さんが生きているので、須田氏の名前はお父さん、子どもは舟見姓になった。満親の名前は、第4次川中島の合戦―永禄4年のころ1561年―に出てくる。系図でいくと、須田信正がいてこれが臥竜山の須田氏で、福島城が重要で底が千曲川の拠点になるので、そこは須田氏が押さえます。

本郷の須田さんは川中島の合戦を経て、北陸の方に移った。北陸時代の須田満親―舟見宮内之介ですがあまりでてこない。直江兼続と遠戚関係になる。直江兼続が世に出てくるのと、須田満親が世に出てくるのはほぼ一緒。その契機になったのは御館の乱です。上越水族館の近くに御館という場所があります。これは越後上杉家の館があった場所です。
この御館をめぐって上杉謙信―こどもがいなかった―が亡くなった後、上杉家の家督の後継をめぐって、謙信の養子である景勝（長尾政景の実子）と景虎（北条氏康の実子）との間で起こったのが御館の乱です。この御館の乱に際して景勝方で活躍したのが直江兼続です。しかも遠戚関係である須田満親も景勝方につきます。これで景勝が負けてしまえば歴史の中で消えてしまったかもしれないんですが、景勝が勝つんですね。景勝は直江兼続を無二の親友であることから若いのに家老級に取り立て頼るわけです。同じように須田満親も取り立て重用していくんですね。

本郷の須田氏、大岩の須田氏の居館とされているのが蓮生寺なんですね。もともとは日龍寺と言われていた場所へ蓮生寺が入ってきた。山城があって下に館がある。武士は山城にずっといるわけではない。戦いがあったときに籠るわけです。地域の住民は山腹・中腹に砦を造って、そこにお殿様がいるというのが山城です。普段は水もないですから館が下にある。戦いがなくなって江戸時代になると、そういう館がどうなるかというとお寺に改装されたりお寺が入ったり、その一族からお坊さんが出てきて一族を弔うお寺にするというようなことが、戦国時代から江戸時代初期にかけての山城と館の関

係なんですが、蓮生寺さんが館の跡だったと言われています。これは昭和 13 年の上高井教育会で作りまして、当時須坂中学に岩崎長思校長先生がいらっしゃいましたが、上高井教育会は先生たちの勉強会で当時はすごく勉強されていました。今は忙しくてなかなか歴史研究ができない。当時は忙しくなかったというわけではありませんが。その先生たちが各村にあるお城とか館跡を調査するんですね。図面をとるわけです。これが大岩城で居館跡です。須坂の図書館へ行けば見れます。満龍寺や日龍寺あとなど昭和 13 年の段階で、虎石丑石は今もあるんですか。私が高校時代の恩師井原今朝男先生が郷土部で山城の調査に行こうとなりまして、大岩城に行ったわけです。注目したのはここで、軍用金を埋めたる場所と書いてある。伝承で須田氏が川中島の戦いで出ていく際に様々なものを埋めていったという伝承が地域に残されていた。

先ほどの大阪の須田さんの系図をみると、満親は義理のお父さんの満泰、本当のお父さんの満国と一緒に越中に移住したと書いてある。満親は越中国友禅（魚津のあたり）の舟見の養子になり舟見宮内小輔を名乗る。満国亡くなったあと舟見姓から須田姓を名乗ることになる。その際に造った供養塔が今の満龍寺にある。復元した舟見城がある。

須田満親が脚光を浴びるようになるのは、上杉と織田が決戦する。上杉と織田は最初は仲が良かった。織田は上杉の力を認めており、織田は色んな贈り物を贈っている。贈られた京都の洛中洛外図屏風は、今国宝に指定されている。しかし、天正4年ぐらいから二人の関係が悪くなった。満親は富山県魚津の周辺に松倉という城があるが、この城の城主になる。このころ信長と景勝は戦争状態になる。信長は、北陸では上杉と戦い、信濃の南では武田と戦っている。信濃は非常に危ない状態。本格的な活動が見られるのは、天正 8 年ぐらいで、天正 6 年 7 年が御館の乱でしたからすぐです。この景勝が能登の大名の山東城へいっている。景勝と一緒に越中に出陣したときに、信長の小出城を落としたりして、天正 9 年に松倉城の城代となっている。一方信長というのは柴田勝家、佐々成正らが越中を総攻撃する。武田を滅ぼし、さらに上杉を滅ぼそうとする両面作戦であるが、天正 10 年 3 月には武田は川中島で滅んでしまう。次が上杉として、海津の城代で信長の家臣であった森長吉が春日山城を攻撃する計画を立てる。春日山城を攻撃されては上杉は滅びてしまいますから、一方で北陸でも信長と戦っていますから、両面から信長に攻められているということになる。

越中、能登のあたりまで上杉謙信の領国だったんですね。しかし天正 10 年のころには能登の半分は信長の所領になっている。須田満親がいたのは松倉城で魚津、天神山、松倉ここがまとまりのある城のグループなんですね。一つのお城で完結しないで、この辺だと臥竜山のお城があって周りの谷筋にはたくさんのお城がある。一括して守りの砦になってゆく。同じです。魚津が一番の拠点ですが、その脇を占めていたのが須田満親の松倉城です。ここは籠城です。満親は景勝に早く兵糧を送ってくれ、兵隊を送ってくれというんですが、景勝は春日山に残らざるを得ないんですね。後ろからは信長の森長吉がきたりするわけです。その時の手紙がこれです。須田相模守が景勝に早く援軍をよこしてくれと催促するわけです。ところが景勝はそれは無理だと。それは行くような状況にない。満親に対し指示を出すから一満親の名前の頭が一個でているが、下は小倉と村山より格が上。満親に対し城の普請をしたり籠城をする際には順番を決めて守りなさいと指示するだけで、兵隊をよこしてくれなかった。これはショックだった。敵の備えのため松倉城の普請については具体的に返答させるので、箇条書きにしてなどの記載がある。須田満親の名前が出てきている。

松倉城は要害堅固でして五箇山（合掌造りの地域）になる。この地域は須坂と一緒で浄土真宗、一向宗、当時は一向一揆というのがありましたが、この拠点なんです。信長はいい悪いは別にして、旧勢力を徹底的に倒すんですね。一番古い勢力は宗教勢力なんです。だから信長は新しいキリスト教の布教を許すわけです。それがどうなるかというと、須坂の人たちは浄土真宗の信者の人たちが多かったんです。兵糧米や軍資金を大阪の本願寺に送っているんです。普願寺も送ってますし、勝善寺も送ってます。同じように越中のこのあたりも浄土真宗の信者が多くゲリラ戦をして信長に抵抗してます。そういう場所に満親がいたということは、満親は浄土真宗と非常につながりが深い。

天正 10 年 6 月は非常に重要な時点で、再来年のドラマは明智光秀だそうですが、楽しみですが、明智光秀は裏切り者といわれていますが、最近の研究では変わってきています。光秀はいろいろな勢力―室町幕府や朝廷―とつながりを持

っていて、ただ恨みで信長を殺した裏切り者ではないんだという説が強い。

このうちの一つの説として三重大学藤田達生さんがとても面白いことを述べていますので紹介します。

6 月 2 日―6 月 4 日の本能寺の変の直前―光秀から満親のもとへ密書が届けられた、といいます。。内容は、上杉方に協力してもらいたいと。光秀方に尽力してもらえれば、相応の報いをしてあげるという、謎めいた手紙であった。光秀はこれから事を起こす。これに上杉が協力してもらえれば、成功の暁にはいろんな事をやってあげるよと。具体的には、能登越中は上杉のものだといっているわけです。とりかえしてあげるよと。具体的に何を指しているかというと、藤田さんは光秀は本能寺の変を起こすんだと。光秀がクーデターを宣言したというのです。こんな大事な話を誰にしてもいいわけがない。この手紙がだれにとどけられたかというと満親であること。それだけ満親は上杉方の重要人物として認められていた。窓口であった。実は本能寺の変には黒幕がいた。本能寺の変の黒幕の一人に、足利義昭がいた。義昭は信長によって追放されてしまったが、もう一度室町幕府を復活させたいと考えていた。満親は足利義昭のもと家臣であった。光秀を使い信長を倒すクーデターであった。室町幕府再興を願っていた。

なぜ満親に密書は届けられたのか。越中の北陸における上杉軍の司令官であった。ほかの重要な情報もここにまとめられていた。もう一つは北陸地域の一向一揆、浄土真宗の信者が一番いるところであった。吉崎御坊というのが北陸にありますが、そこは浄土真宗の拠点であった。加賀の一向一揆が有名ですが、本願寺の門主さん、光佐がいた。そこと満親がつながっていた。重要な役割を果たしていたという。古文書が残っている。

本願寺の光佐―御門主さまから須田満親に対してこんな大事な手紙を出している。井上本誓寺―もともとは中野にあった―小坂神社の近くに本誓寺という地名が残っている。このあと上越に行っている。この中に本願寺光佐は、御門主は須田満親に何と言っているかというと、「貴国の一向宗の門徒たちについて、よろしくおとりなしをしていただければ幸いである。」と書いてある。本願寺の門主さんが、信濃国の一向宗の門徒たちについて、よろしくお願いしますと。これはどういうことかというと、須田相模守満親というのは、一向宗の門徒の代表のような役割だった。笠原本誓寺―信長と浄土真宗との政争だった石山合戦で兵糧米を出している。その際にありがとうという手紙を御門主さんからもらっている。こういう手紙が本誓寺に残っている。あて先は須田満親あてである。これは、満親が一向宗の門徒だったといえる。

この書状から見ると、満親は信濃国の一向宗の門徒への影響力を持っていた。長野県で一番多い仏教の宗派は曹洞宗なんです。しかし須坂の場合は浄土真宗なんです。満親が浄土真宗の門徒さんであったことは当然ありうるわけです。

先程五箇山という話をしました。魚津、松倉城の城代だったわけですが、そのすぐ近くが一向宗の門徒がゲリラ戦をしていた五箇山なんです。満親がこの門徒衆を指揮していたことがわかる。これはもともとは本郷にあった。普願寺あとがそれです。御坊屋敷と呼ばれている。お寺の伝承では、関東から本郷に普願寺が移ってきたのが 15 世紀、1400 年代ぐらいなので、南北朝か室町時代にこっちに普願寺が移ってきたことになる。

普願寺を含めて磯部六ケ寺という。浄土真宗の勢力グループがあった。磯部はもともとは関東、利根川の流域にあった。南北朝から室町時代のころに関東から山を越えて―中山道ではない。須坂に関係するのは大岩普願寺、勝善寺、本誓寺、須坂にある浄土真宗のお寺というのは、磯部六ケ寺の末寺とか孫末寺などが多い。ここが長沼、そして井上があって福島ですが、草津道とか毛無道とか三原道、こういう関東の道から浄土真宗のお寺さんが入ってきている。ここに旧普願寺があったりします。須坂の町中にいくと勝善寺―もともとは八町にもあった。普願寺のあとも八町にあったり、本誓寺は井上にあったり。関東から千曲川に抜けるルート上に関東から移ってきた浄土真宗のお寺がいくつかあります。

茨城県の古河にあったお寺がどうしてわざわざこんな方にきたのか。善光寺があったこと、利根川の舟運を使ってのぼって上州の道でこの辺にやってきている。なぜここに関東の浄土真宗のお寺が移り住んできたのか。そこは今後解明しなければいけない。その解明の一端を握っているのが、ここ本郷なんです。

浄教寺―高山村山田にあった大きなお寺で、石山合戦で兵糧米を送っていますが、今高田―上越にあります。須坂普願寺にある聖徳太子のお像―須坂市の指定文化財になっております。浄土真宗の大事な仏様にあたるのは聖徳太子で

す。聖徳太子は日本に仏教が伝来した時にいた人ですから、仏教の中興の祖、日本の仏教の始まりといってもいい。浄土真宗は非常に大事にします。台座からほぞを抜くとここに銘が入っていて、仏師須田なにがしと書いてある。つまりこの像が須田氏の建立、須田氏の発願で創られた。普願寺と須田氏とは関係が深い。本郷との関わりが出てくる。

本能寺の変の後、満親はどうなったかというと、信長が倒れた後、信長の家は、子ども3兄弟がいまして、長男は死に次男の信雄、3男の信孝で跡目争いになる。その際に光秀を討った秀吉がぐっと上がってきて、織田家は没落してしまう。その時、足利義昭は秀吉に協力を求めたがうまくいかなかった。そこで足利義昭は柴田勝家と協力して室町幕府を復興しようとします。義昭はどうしたかというと、上杉家の重臣であった須田満親にわざわざ手紙を書きます。景勝はもともとは勝家と戦っていたけれど勝家と和睦しなさいと。そして勝家が上洛して室町幕府をつくる、再興するという協力を満親がやってくれと。上杉家の重臣としてお殿様の景勝になんとか鈴をつけてくれというわけです。

一方の秀吉のほうはどうかというと、秀吉も満親をかっている。満親に対し、柴田勝家―越前福井―を攻撃するから越後の上杉家は一緒に攻撃しようと誘い書きをしているわけです。

両方の勢力から満親は大事にされているわけです。古文書が残っているわけです。足利義昭が書いた須田満親あて。勝家に上洛しろと命令したから協力しろと言っている。上杉景勝に直接言うのでなく、外交の窓口である須田満親にいっているところがいいじゃないですか。

結局どうなったかというと、賤ケ岳の合戦になり、羽柴秀吉と柴田勝家が織田信長のあとの天下分け目の一戦といってもいい。どちらが信長の後継者かということになる。結果的には羽柴秀吉が勝った。その時に、現在の須田さん所有の古文書ですが、長い手紙です。須田満親に対し秀吉が自ら書いているわけです。この賤ケ岳の合戦の状況を逐一書いているわけです。上杉景勝に書いているわけではない。家臣である満親に書いている。柴田勝家を倒せば越中能登の支配を認めるといっている。

そのあと秀吉が家康と戦った小牧長久手の戦いでも同じように、満親に対して今の戦いの状況を逐一書いている。非常に面白い。これも大阪の須田さんのお宅にある古文書でして、秀吉の奉行衆が満親を通じて景勝と関東の争いを調停するように、というようなことも出している。

さて外交能力にたけた満親ですが、この時はまだ北陸にいる。須坂－北信に戻ってきたのは天正13年1585年です。川中島の合戦から30年近くたっているわけです。この時期は非常に微妙な時期で、同じ須田氏の一族、本家の臥竜山の須田氏、福島の城代であった須田信正が上杉家の家臣であったが裏切りをするという情報が流れて、信正は殺されてしまう。という状況の中で、北信濃の情勢が悪化しているということで戻ってきた。天正13年上杉景勝が須田満親に対して、海津城代すなわち松代の城主になりなさいと。ついては1万2千石やると。これは信濃の武士の中では最大である。で、北信濃の検地を行いなさい。軍事指揮権―犯罪者がいれば逮捕していい。これはお殿様の権限で上杉景勝しかできないんですが、この権限を北信濃に限って須田満親やっていいよ。これはすごいことで他には無い。そのくらい上杉景勝は須田満親を認めていたわけです。こういう文書があります。

天正13年、海津城に入ってきた。地域の住民は須田満親という名前も知らない訳ですが、新しく海津の城主になった須田満親が入るから今後は須田満親の指示に従いなさい。これは正に景勝の指示だということです。これは井上源六郎―若穂保科にいた井上氏に対して出している文書です。

満親は検地を行っています。江戸時代より前の検地帳が長野市中氷鉋に残っています。「春」というハンコがありますが、これは須田満親のハンコなんです。現物は残っていない。

満親は非常に秀吉に愛される。これはどういうことかというと、天正16年に上杉景勝、真田昌幸らが秀吉に謁見する。おととしの大河ドラマでもこの場面が出てきた。この時満親も一緒に上洛している。その際秀吉から、お前に名前をやる。「豊臣」という名字を与える。翌年にはさらに天皇家から、従五位下、相模守を任ぜられた。従五位下は貴族である。五位と六位は断絶しており、五位は貴族で御所に行ける人たち。正に満親は貴族になっている。こういう書状をもらっている。

黒っぽい紙―これは手紙を溶解・すきなおした宿紙というもの。これは朝廷のしきたりで、口宣案＝天皇の命令を承って出すもの。

そして天正 13 年に信濃に戻ってまいりまして、地元―本郷―に貢献するわけです。満国の菩提を弔うため満龍寺を建立した。これがその時満親が出した満龍寺さんに出した寄進状になるわけです。戦国時代の文書が須坂にある訳です。この後、須田満親は小田原攻めで戦功がありまして、海津城の城代と東北の山形県の庄内、酒田の城将に任ぜられています。ただ、慶長 3 年―1598 年に秀吉の命令で上杉景勝は会津に入封してしまった。この際はどうなったかというと、満親と長沼にいた島津貞直は引渡奉行として―障子一枚、ふすま一枚も残さず持っていけ、ということだった。家臣も全部連れていく。この地に―例えば本郷にいるという選択をした場合は武士ではなく百姓になる。これが兵農分離なんです。

満親はどうなったかというと、満親には長男満胤がいたが改易されている。また、満親は会津入封の翌年 3 月に亡くなっている。理由は諸説ありまして、会津に移るのを潔しとせずとして自殺した説―これは文禄 3 年の定納員数目録に書かれているし、あるいは 60 近いことから病死であるということである。会津入封が 3 月であり、この 3 月に満親が死んでいるというのはつじつま的に不審であるということになります。長男は改易を受けていますが、次男―長義―は存続され、上杉家は会津 120 万石、のちに関ヶ原の合戦で負けたということで米沢 30 万石になります。梁川というところに長義が移ります。福島の原発の近くにあります

松代にある浄福寺というお寺で、もともとは松代東上にあったお寺ですが、満親が浄土真宗に中興開基してまして、須田家の紋の揚羽蝶が書かれています。お寺というのはお寺の紋と旦那さんの紋を二つ入れるんですね。この浄福寺に満親の五輪塔であると伝えられるものが鎮座しています。

そのほかに須田氏の関係の古文書が残っています。芝宮に須田満親、道賢丸（景実）という親子の寄進状があります。芝宮の広田神主にお神楽を寄付したというのが残っている。これは改易された長男満胤の寄進状が残っていますし、長義の寄進状も芝宮に残っています。

高山村の高杜神社にも、天正 17 年に豊臣姓をもらって上洛したその時のお礼として高杜神社に須田満親が高井野大明神に大鷹を寄付したという文書が残っている。

あとは、大坂冬の陣で須田長義は大活躍をしています。徳川秀忠から感状をもらっている。よく頑張った。傷だらけになって瀕死の重傷を負うわけですが、その傷がもとで亡くなったのが長義です。

須田氏の家臣の坂田采女―坂田が須田氏の発祥の地だとすると、まさに地元です。この坂田采女が大坂冬の陣で敵方の豊臣秀頼の槍の師範を打ち取っています。坂田采女のお友達に渋江熊蔵―浪人であった―というのがいて、手柄がないとなげき悲しんでいるのを見て、采女は手柄をやるからもう一度仕官をしたらどうかとなった。このいきさつをみていた松本助兵衛さんが注進をして大御所から二人とも立派であると称賛された。

須田氏は江戸時代家老の家として残りますが、上杉鷹山の時代に改易されてしまう。古い重臣たちは改革の際には不要であるということで家が取り潰しになってしまう。（七家騒動）

そのあとまた復帰するわけですが、上杉家は 30 万石という小さな藩になってしまい、古参の信濃の武士たちも生き抜いてゆくという大変なことだった。

本郷出身の須田一族について、この際もう一度皆さんに深めていただいて、地域が生んだ大きな一族である、歴史を動かした人たちと対等に渉っていたということに、興味をそそられることになります。

1 時間ということでご清聴ありがとうございました。